

鳥鳴く朝のちい子ちゃん

小川未明

青空文庫

ちい子ちゃんは、床とこの中なかで目めをさしました。うぐいすの鳴なき声こえが、きこえてきました。

「おや、ラジオかしら。」

このごろ、いつもお休やすみ日びの朝あさには、小鳥ことりの鳴なき声こえが放ほう送そうされたからです。しかし、その声こえは、お隣となりの庭にわの方ほうからきこえてくるような気きがしました。あちらには、梅うめ林ばやしがあるし、木立こだちもたくさんしげっていますから、どこからかうぐいすが飛とんできて鳴ないているのでないかとも、思おもわれました。

「お母かあさん、あれラジオのうぐいすなの。」と、ちい子こちゃんは、聞ききました。

とつくに起おきて、家いえの中なかで働はたらいていらした、お母かあさんは、

「ほんとうのうぐいすですよ。花はなが咲さいているから、飛とんできたのです。さあ、あんたも早く起はやおきて、お顔かおを洗あらいなさい。いいお天てん気きですよ。」と、おっしゃいました。

「ああ、そうだ。日にち曜よう学がっこう校こうへいつて、先せん生せいからお話はなしを聞きいて、それから、とみ子こさんや、まさ子こさんといっしょに遊あそぶ、お約やく束そくがしてあったのだ。」と、思おもい出だすと、ちい子こちゃんは、すぐとこに床とこから出でました。

空そらは、緑みどり色いろにすみわたっていました。朝あさ日ひがさして、木き々ぎの葉ははいきいきとかがや

いて、いい気持ちであります。

ちい子ちゃんは、ご飯をいただいてから、お机の前でまごまごしていました。お母さんに髪を結ってもらって、時計を見ると、じき八時になります。

「あら、おくれたらたいへん。」といって、お玄関で、げた箱からくつを出してはいて、お家を出ました。

さつきのうぐいすでしよう、こんどは、どこか遠くの方で鳴いている声が、きこえてきました。垣根のそばを歩いていくと、赤いつばきの花の咲いた家があります。ご門のところに、ぼけの花のいっばいに咲いている家もありました。またお庭に白い花の咲いた、高いこぶしの木のある家もありました。そして、ちい子ちゃんが、広い通りへ出ようとしたとき、一軒のご門の前に、一人のおばさんが、ふろしき包みをかかえて、紙片を持って、門札をながめながら、ぼんやり立っているのを見ました。ちい子ちゃんが近づくと、

「お嬢ちゃん、川上さんという家をごぞんじありませんか。」と、おばさんは、聞きま

した。

「川上さん？ 私、知らないわ。」

「番地を書いてもらってきたのですけれど、この番地が見つからないのですよ。」

おばさんは、家政婦さんか、女中さんでありました。雇われるお家がわからなくて、困っているのです。ちい子ちゃんは、白い新しいたびをはいているおばさんが、なんとなく気の毒になりました。

「おばさん、待つていらつしやい。」

ちい子ちゃんは、あちらの角にあつた、たばこ屋へ飛んでいきました。そして、川上という家をたずねたのです。

「ああ、川上さんですか。このごろ、越してきた方でしょう。こちらの路地を入つて、つき当たりの家です。」と、たばこ屋で教えてくれました。

ちい子ちゃんは、あちらに立つていた、おばさんのところへ飛んでいつて、知らせてやりました。

「お嬢ちゃん、どうもありがとうございます。」と、おばさんは、喜んで、いくたびも頭を下げました。

ちい子ちゃんも、うれしかったのです。往来へ出ると、人がたくさん通っていました。草花屋が、手車の上へ、いろいろの草花の鉢をのせて、「草花や、草花。」といいながら、引いていきました。

どこを見ても、もう、すっかり春の景色です。教会堂のどがった屋根が見えていました。

神さまは 軒の

こすすめまで

おやさしく いつも 愛したもう

ちい子ちゃんは、うたいながら、教会堂まで走っていくと、はや、お説教が、はじまっています。みんなが、静かにしていますので、ちい子ちゃんは、お説教の終わるまで、外に待っていると思いました。

ドアの外には、子供たちのげたが、ちらばっています。ちい子ちゃんは、それを一つ、一つ、きちんとならべました。また、げたはこの下に投げ出してあつたスリッパを、箱の中へ収めていました。

ちい子ちゃんは、お説教のあとで、子供たちが、幾組かに分かれて、先生から聞くお話をたのしみにしていました。

「まさ子さんや、とみさんは、どこにいらつしやるだろう。」と、ドアのすきまから、内をのぞいたのです。けれども、みんながあちらを向いて、同じ頭をしているので、よく

わかりませんでした。高窓の色ガラスから流れる、黄や紫や、青の光線は、不思議な夢の国を思わせました。壁にかかっている、いつもにこやかなお顔のマリアさまは、手をさしのべて、みんなの頭をなでてくださいました。ちい子ちゃんは、びっくりしました。

「おばあちゃん、おんも……よう。」と、このとき、坊やが、わめいたからです。みんなは、だまって、牧師さまのお話を聞いているのに、坊やだけは、わからないから、外へ出たいというのでした。

「おとなしく、じつとしていらつしやい。」と、大きな声で、おばあさんが、いっています。

急に、この二人の声で、ほかの人たちは、牧師さまの声が、耳に入らないので、困っているようでした。

「おばあちゃん、おんもよう。」と、坊やは、腰かけから立ち上がって、すねています。

「外へ、いくのかい。」

みんなが、おばあさんの方をふり向きしました。しかし、おばあさんは、平気なものです。「どうぞ、しずかにしてください。」

牧師さまは、たまりかねて、おばあさんに注意なさいました。

「さ、さ、おんもへいきましよう。」と、おばあさんは、孫の手を引いて、ドアの方へやってきました。

「あら、小西のおばあさんだわ。」と、ちい子ちゃんは、目をまるくしました。

小西のおばあさんは、つんぼで、人のいうことが、よくきこえぬのです。だから、自分も、大きな声を出して、なんとも思わなければ、また、みんなに迷惑をかけることもわからないのでした。

おばあさんが、坊やをつれて、ドアの外へ出ましたから、そこに立っていた、ちい子ちゃんは、おじぎをしました。

「だれかと思つたら、ちい子ちゃんですか、あんたは、いまいらしたの。」と、おばあさんは、大きな声でいいました。

「きれいに、だれが髪をゆつてくださったの。」

「お母さん。」と、ちい子ちゃんは、答えました。

「まあ、赤いリボンをつけて。」

おばあさんの声が、よくへやの内へ聞こえるので、みんなが、こちらを向いています。

ちい子ちゃんは、きまりがわるくなりました。

「坊や、おいで。」

ちい子ちゃんは、坊やをつれて、教会堂の横手の方へいきました。そこには、桜の木があつて、花が咲いていました。腰かけや、すべり台などがありました。

もう、花が、ちら、ちら散つています。坊やは、それを拾っていました。

「坊や、すわると、おべべが、よごれるよ。」

おばあさんが、大きな声でいいました。ちい子ちゃんは、ここなら、みんなのおじやまにならぬと思つて、安心していました。

ちい子ちゃんが、ベンチに腰かけていると、おばあさんが、そばへきて、

「あんたのおくつは新しいの、いつ買つてもらつたの。」と、聞きました。

「こないだ、学校へ上がったときよ。」と、ちい子ちゃんは、答えました。

「いま、おくつは、お高くなつたんでしよう。」と、おばあさんは、いろいろのことを話しました。坊やは、拾つた花びらを、またまいていました。花びらは、ひらひらと白いちようちようのように、風に舞いました。

「ちい子ちゃん、あんた忘れたでしょう。小さいとき、道を歩いていて、前へいくよその

お姉さんを見て、お母さん、あななくつよ、わたしほしいわといったことを。そのお姉さんのくつは、かかとの高い、さきのがった、ハイカラのおくつで、ダンサーか、女優さんのはくくつで、あんたが、そういったものだから、通る人がみんな見たのでそのお姉さんは、きまり悪がつて気の毒だとお母さんが、おつしやいました。」と、おばあさんが、いいました。

「おばあさん、ハイヒールでしょう。」

「そう、そう、そのハイヒールとかいうくつです。ちい子ちゃん、くつはあんなのより、やはりこうした、かかとの平らな、すこし大きいぐらいのが体のためにいいですよ。」

おばあさんは、たいくつなもので、だれとでも話したかったのです。

「ちい子ちゃん、そんなこと覚えていますか。」

「わたし、忘れたわ。」

「みんな小さいときのことは、忘れてしまうものかね。」

そのとき、坊やは、ひとりであって、教会堂の門から、外の方へ出ていこうとしていました。これを見つけた、おばあさんは、

「あ、坊や、ひとりでいつては、あぶないよ。」と、もう、ちい子ちゃんのことなど忘れ

て、坊^{ぼう}やの後^{あと}を追^おっていきました。

「ほんとうに、私^{わたし}、そんなことがあつたかしらん。」

ちい子^こちゃん^{はん}は、いまごろ牧師^{ぼくし}さまのお説^{せつきよう}教^{きやう}が終^おわつて、先生^{せんせい}のお話^{はなし}がはじまる時^{じぶん}分^{ぶん}だと思^{おも}つて、ドアの方^{ほう}へ、足音^{あしおと}軽^{かる}く歩^{ある}いていきました。そして、静^{しず}かに中^{なか}へ入^{はい}つていきました。ちい子^こちゃん^{はん}は、かわいいお嬢^{じやう}ちゃん^{です}です。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「夜の進軍喇叭」アルス

1940（昭和15）年4月

※表題は底本では、「鳥《とり》鳴《な》く朝《あさ》のちい子《こ》ちゃん」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年4月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鳥鳴く朝のちい子ちゃん

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>